

## 第十一章 土地の地代——その性質と形成（十）

### 過去四世紀における銀価の変動に関する補論

改良の進展は三種の粗生産物に異なる影響を与える

#### 第二類

第二類の粗生産物とは、需要の伸びに応じて人の産業で増やせる品目である。未開の地では自然が過剰に生むためほとんど値がつかず、耕作が進むと土地はより収益性の高い生産に振り向けられる。改良の長い過程では供給は持続的に縮小し、同時に需要は持続的に拡大する。その結果、実質価値（すなわちそれで購買・指揮できる労働量）は段階的に上がり、やがて最良の耕地のほかの産物と同等の採算水準に達する。そこに達すれば、それ以上の上昇は起こりにくい。仮に上振れすれば、土地と労働が速やかに追加投入され、供給が増えて上昇は抑えられるからである。

家畜を例にとると、家畜の値段が、人の食用穀物と同じ利回りで飼料生産のために耕地を用いても採算が合う水準に達すると、その後の上昇は抑えられる。なお上がるなら、

穀物畑は直ちに牧草地へ転用される。他方、耕地の拡大は自然の草地を減らし、手をかけずに得られていた食肉の自然供給を細らせる。同時に、穀物（または同等の購買力）

で肉を買う人が増え、需要は一段と強まる。ゆえに、精肉と家畜の価格は、最も肥沃で整備された耕地を穀物から飼料へ振り向けても穀作と同等の利益が得られる水準に至るまで、徐々に切り上がる。とはいえ、そこまで耕作が行き渡るのは改良がかなり進んだ段階で、それ以前は国が成長しているかぎり家畜相場は上昇しがちである。欧州には、なおこの水準に達していない地域もある。連合法（一七〇七年）前のスコットランドは未達で、家畜以外に向かない土地の比率が高く、市場が国内に限られた事情のもとでは、飼養のために耕地化するのが見合うほどの高値にはなりにくかったと考えられる。イングランドでは、ロンドン周辺は前世紀初頭にこの水準に達していたようだが、遠隔諸国ではかなり遅れてからで、地域によってはいまなお未達の可能性がある。第二類の粗生産物の中では、家畜が最初にこの採算上限に到達しやすい。

家畜の値が、耕地を家畜用の飼料生産に振り向けても人の食用作物と同等の収益を得られる水準に至るまでは、最上の耕地であっても全面耕作はほぼ望めない。都市から肥料を運べない遠隔農場（広大な国々では多数派）では、手入れの行き届いた耕地の面積

は自家生産の肥料量に比例し、その肥料量は保有する家畜頭数に比例する。施肥は放牧による自然施肥か、牛舎飼育で得た厩肥を畑へ運ぶかの二法であるが、家畜価格が耕地の地代・利潤を賄えないうちは、耕地での放牧すら採算が取れず、まして飼料を刈り集めて与える舎飼いは一段と不利である。舎飼いに要する飼料は原則として改良済み耕地の産物に頼らざるを得ず、荒地に散在する乏しい産物を拾い集めるのは労多く費高であるからだ。ゆえに、放牧が不採算な価格なら、運搬を伴う舎飼いの採算はなおさら悪い。この条件下では、舎飼いできる頭数は耕作上不可欠な最小限に限られ、その厩肥では耕作可能な全区画を常時良好に保つには明らかに不足する。乏しい肥料は最も効果的な区画（肥沃地や屋敷近傍）に重点配分され、そこだけが良好に維持される一方、残りの大半は荒れ、貧弱な牧草がわずかに生えるばかりで、痩せた家畜が命をつなぐのがやっとなのである。完全耕作に見合う頭数に比べれば不足なのに、実際の産出に比べれば過密という矛盾も生じやすい。荒れ地の一部は六〇七年の粗放放牧ののち起耕され、粗悪なオート麦などが一、二作だけ穫れてすぐ疲弊し、休ませて再び放牧に戻る。別区画でも同じ回転が繰り返される。連合法（一七〇七年）前のスコットランド低地では、これが一般的な営農方式であり、常時しつかり施肥された区画は農場全体の三〇四分の一に満たず、

ときに五〇六分の一にまで落ち込んだ。他は施肥されず、一定の持ち回り区画だけが定期的に耕されては疲弊した。この体制では、良地でさえ潜在力に比して収穫は乏しいが、当時の低い家畜価格の下ではほぼ不可避であった。今日なお旧来方式が広く残るのは、一部は無知や旧習のためであるにせよ、より大きな理由は、直ちに優れた方式へ移れない自然の制約にある。第一に、小作人が貧しく、完全耕作に必要な家畜群を蓄える時間がまだ足りない（価格上昇は保有拡大の採算を良くする一方で取得を難しくもする）。

第二に、家畜を確保できても、それを適正に維持できる土地条件に整える時間がなお必要である。家畜群の拡大と土地改良は車の両輪で、どちらか一方だけを先行させることはできない。これらの障害は長い儉約と勤勉によつてしか取り除けず、旧来の方式が国中で完全に廃れるまで、さらに半世紀から一世紀を要するかもしれない。それでも、連合がスコットランドにもたらした商業的利益の中では家畜価格の上昇が最大級であり、高地の地所価値を押し上げ、低地の改良を促した主因でもあった。

新設の植民地には長く放牧以外に使えない広大な荒地があり、家畜は急増して供給過剰となり、価格は必然的に下がる。北米の欧州系植民地でも、家畜は欧州から持ち込まれたが、まもなく繁殖が進み価値は低下し、馬でさえ森で野生化し、所有権を主張して

回収する価値も乏しいと見なされた。こうした植民地では、耕地の産物で家畜を飼って採算が取れるようになるまでに相当の時間を要するため、肥料不足と、耕作用家畜の頭数と耕作予定地の不均衡が続き、スコットランド各地で以前なお見られたのに近い農法が根付きやすい。一七四九年に北米の英植民地を視察したスウェーデン人旅行家カーム氏は、穀田用の堆肥はほとんど作られず、一つの土地を連作で疲弊させると新しい未開地を拓き、そこも痩せればさらに移ると報告した。家畜は森林や未耕地を徘徊し、慢性的に飢えがちで、春先の早食いで一年生の草は開花・結実前に食い尽くされ、ほぼ絶滅した。入植初期には最良の天然牧草で、密生し背丈三〜四フィートに達した一年生草が、当時は牛一頭も養えない区画にまで衰え、かつては四頭を養い、各牛は現在の一頭の四倍の乳を出したと伝えられる。貧弱な牧草が家畜の質を世代ごとに退化させたと氏はみる。この姿は三十〜四十年前のスコットランドで一般的であった小型で発育不良の系統に近かった可能性が高い。もつともスコットランド低地の多くでは、その後の改善は著しく、地域によっては品種更新もあつたが、決定的だったのは給餌量を十分に与える飼育の普及である。

確かに、改良がかなり進むまで家畜の価格は、飼育のために耕地を起こすのが人の食

用作物の栽培と同程度に採算に合う水準には至らない。とはいえ、第二類の粗生産物の中では、その価格帯に最も早く達するのは家畜であり、家畜価格がそこまで上がらないかぎり、欧州各地が実現している完成度に改良を引き上げるとは事実上困難である。

第二類の品目では、家畜が最初に採算上限へ達しやすい一方、鹿肉（ベニス）は最後に近い。英国の鹿肉は法外な値付けに見えても、鹿園（ディアパーク）の維持費を償える水準ではないことは、飼養の実務家に周知である。もし採算が立つなら、鹿の肥育は、古代ローマで小鳥トルデイの肥育が一般化していたのと同様、すでに普通の営農項目になっていたはずだ（ウアツロやコルメラは、その商いが非常に有利であったと記す）。渡り鳥オルトランの肥育は、フランスの一部では今も収益が見込めるといふ。これからもベニス人気が続く、英国の富と贅沢が拡大するなら、相場は今よりさらに上がる可能性が高い。

家畜（必需）の価格が最高値に達する時期と、鹿肉（ぜいたく）の価格が同じ水準に達する時期の間には長い隔たりがある。その間、状況に応じて前後しつつ、多様な粗生産物が段階的に最高値へ達していく。

多くの農場では、納屋や厩から出る落ち穂・もみ殻・敷き藁・残餌だけで一定数の家

禽を養える。失われるはずの資源を餌にできるため費用はほぼ不要で、安値でも売り出せ、収入の大半が利益となる。この範圍の頭数なら値崩れが起きても飼育をやめる事態はまず生じない。耕作が未熟で人口が希薄な国では、こうした無償の餌で育つ家禽だけで需要が満たされることがあり、その段階では家禽は精肉や他の動物性食品と同程度に安いことが多い。ただし、この「無費用の家禽」の総量は、同じ農場で得られる精肉の総量より常に小さい。富と贅沢が広がると、品質が同じなら希少な方が選ばれるため、改良と耕作の進展につれて家禽の価格はじわじわ精肉を上回り、やがて家禽の給餌を目的に土地を耕すこと自体が採算に合う水準に達する。そこまで来れば上昇余地は小さい。上がればすぐにその用途への土地転用が進むからである。フランスの幾つかの州では家禽飼育が農村経済の重要部門で、十分な採算が見込めるため、この目的でトウモロコシやソバが相当量作付けされ、中規模農家でも四百羽規模の飼養が見られる。他方イングランドでは家禽飼育はそこまで重視されないが、価格はフランスより高い。フランスからの相当量の供給に依存しているからである。改良の過程で動物性食品が最も高くなるのは、耕作して育てる方法が一般化する直前である。一般化前は不足が価格を押し上げ、一般化後は給餌法の工夫により同じ面積からの産出が増え、豊富さが価格を下げる。改

良によって低価格でも採算が合うからこそ、その豊富さは続く。クローパー・カブ・ニンジン・キャベツの導入が、ロンドンの精肉相場を前世紀初頭よりいくぶん押し下げたのは、おそらくこのためである。

豚は残渣を食べ尽くす「無駄取り」として、当初は家禽と同列に飼われた。無償またはごく低コストで育てられる頭数で需要が十分満たせる間、豚肉は他の精肉より著しく安い。ところが需要がその範囲を超え、豚にも他家畜と同様に飼料栽培と本格的肥育が必要になると、価格は上がる。その水準、すなわち他の肉との相対価格は、国の自然条件と農業水準に左右され、豚の飼養費が他畜種より高ければ高く、低ければ安くなる。

実例として、フランスでは豚肉は牛肉とほぼ同価格（ビュフォン氏）であり、英国の多くでは現状、豚肉のほうがいくぶん割高である。

英国で豚肉と家禽の価格が高騰した要因として、コテージ住民や零細な土地占有者の減少がしばしば指摘される。これは欧州では改良・集約化の前触れとして先行しがちで、その過程でこれら品目の値上がりを本来より早く、かつ急に進めた面がある。零細層は、台所の残りや乳製品の副産物（ホエー・脱脂乳・バターミルク）を餌にし、不足分は周囲の草地で補って、つがいの鶏や雌豚・子豚をほぼ無償で維持できた。この担い手が薄



れると、そうした低コスト起源の供給が確実に瘦せ、価格の立ち上がりは前倒しとなり、上げ幅も大きくなる。ただし、改良が進めば価格は遅かれ早かれ上限に向かう。すなわち、家畜の飼料を生む耕地に支払う労賃・経費が、他の耕地と同様に回収できる水準である。

酪農は豚や家禽の飼育と同じく、本来は余剰を無駄にしない家業であった。牛は家族や仔牛の必要量を超えて季節的に多くの乳を出す、生乳はとりわけ傷みややすい。そこで生バター・塩バター・チーズへと加工し、自家用以外を市場へ回す。乳製品の相場は屠肉や給餌費と強く連動し、価格が上がれば労務・衛生の費用が回収でき、関心の高まりとともに品質も向上する。やがて乳のためだけに最良の耕地を飼料生産へ振り向けても採算が合う段階に達し、そこから先の上値は限られる。さらに上がれば直ちに土地転用が進むからである。イングランドの大半は既にこの段階にあり、良地が広く乳用に使われる。他方スコットランドは有力都市周辺を除き未達で、一般農家が良地を乳専用の飼料作に割く例は少ない。近年相場はかなり上がったが、なお採算線に届かない公算が大きい。イングランド産に対する品質の劣位は価格差に見合う帰結であって原因ではなく、仮に品質を引き上げても、現状の需給では高値ではさばけず、現行価格では土地・

労務費の回収が難しい。なおイングランドでも、価格優位があっても酪農は穀作・肥育という二本柱より収益性が高いとはみなされず、スコットランドではなおさら分が悪い。

どの国でも、土地は、そこから得られる粗生産物の価格が全面的な改良と耕作の費用を賄える水準に達するまで、完全には改良・耕作されない。すなわち各産物の価格は、多くの耕地の地代の基準となる良質穀作地の地代を支払い、さらに農夫の賃金と諸経費を良質穀作地並みに賄い、結果として投下資本を通常利潤とともに回収できる水準でなければならぬ。この価格上昇は、その産物のために土地を実際に改良・耕作する以前に生じていなければならない。改良の目的は利益であり、損失が避けられない事業は改良ではない。費用を下回る価格の産物を当て込んで土地を改良すれば、結末は必ず赤字となる。ゆえに、国土の完全な改良と耕作が最大の公共的利益であるかぎり、粗生産物の広範な価格上昇は災厄ではなく、その最大の利益に先立ち、かつそれに随伴する不可避の前兆とみなすべきである。

こうした粗生産物の名目価格の上昇は銀の価値下落によるのではなく、実質価格の上昇による。すなわち、それらは以前より多くの銀に、かつより多くの労働と生計に見合う。市場に出すまでに要する労働と生計の投入が増えたため、市場に並ぶ時点で、より

11 第十一章 土地の地代——その性質と形成（十）

多くの労働と生計に等しい価値を持つのである。